赤波根さんちの事情～秘書見習いの受難

すかーれっとしゅーと

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

田中浩二１８歳。

いきなり両親から「仕事を継いでほしい」と言われる。

その仕事は、ある家の秘書。

とりあえず、両親の仕事が忙しくなるということで、預けられたのは「赤波根（あかばね）家」。

両親が秘書としてお世話になっている家だった。

その家には、他には言えない秘密があって……。

夢に出て来た登場人物をまとめて、書いてみたらこうなった。

そんな感じです。

ご都合主義満載……には、ならないよう、頑張ります。

目次

第1話　霹靂　1
第2話　双子　11
第3話　禁秘　20

第1話　霹靂

「いきなりだが、お前には、家業を継いでもらうつもりでいる」
１８歳の誕生日を迎えた日を過ぎた休日。
俺、田中（たなか）　浩二（こうじ）は、父さんにそんなことを言われた。
家業ってなんだ？そんなこと聞いたことがないのだが。
「ウチは代々、とある家の秘書を務めている」
初耳なんだけど。
確かに父さんは、常に家にはいなかった。
けれど、それは普通に友達から聞く、「サラリーマン」である父親と、何ら違いはなかったはず。
「母さんも、それなりによくしてもらってるわ」
父さんの隣で、母さんが付け加える。
両親の間では、公然の事実のようだ。
「お前に黙っていたのは、理由があったりするのだが……まあいいか」
少し微笑みながら、そんなことを言っている父さん。
その隣で、母さんは、優しい目で見つめてくる。
「どうせ、将来のこと、まだ決めてないんだろ？」
確かに決め兼ねている。けど、そろそろ決めなくてはいけない、高校3年生。
何となく大学に行って……そんな青写真を思い浮かべてはいた。
父さんには、そんな心を見透かされていたようだ。
「それは、大学進学は、許されないってことだろうか？」
ウチってそこまで貧乏ってことなのかな。
大学に通わすお金が工面できないって。
それなら早く言って欲しかった。
ウチの高校って進学校なんだぜ。そこに行かせておいて、それはないだろう。
例えそうであっても、早く言ってくれればよかった。
奨学金を申請したり、アルバイトでお金を貯めるとか、方法はいくらでもある。

「いや」
親父は首を振った。
「むしろ、大学は出ておいて欲しい。世の中を知っておくために必要だ」
そうなのか。では、なぜこのタイミング……。
「先日、18になっただろう？そういう年齢になったからな」
そういうことなのか……。
まあ、聞くだけ聞こうか。
「で、ある家、とは？」
「俺が、というか母さんもだが……、ウチが遣えている家は、赤波根（あかばね）家という」
「父さんと母さんは、そこで秘書をやってるの」
赤波根家。馴染みのない名前だ。
父さんだけでなく、母さんも秘書をやってるのか、そこに驚いた。
母さん、秘書って感じ、全然しないからなぁ……。
秘書を必要としているということは、それなりの家なんだろう。
なにせ、代々続けている。
赤波根家は、歴史もある旧家であるに違いない。
「で、これもいきなりなんだが、その赤波根家の屋敷に、住んでもらおうと思っている」
「父さんも母さんも、これからは忙しくて、世界中を飛び回るから、面倒見てもらおうと思って」
「ならば、誠（まこと）のところ……赤波根家で面倒みてもらおうと思ってな」
また、予想していないことを言われた。
つまり、これからは、父さんと母さんは、仕事が忙しくて、家に帰れなくなる。
1人暮らしをさせるよりは、そのうちお世話になるであろう赤波根家に預けようとしているようだ。
ゆくゆく秘書家業を継いでもらう家、これを機に、顔通しってことなんだろう。
代々秘書をしていると言われても、俺、何も知らないし。

「あ、住むだけだからな。仕事はしなくてもいい」
「そうね、いきなり秘書の仕事は無理なのは、父さんも母さんも、よくわかってるから」
　そうなのか。少し安心した。
　けど、何も事情を知らない家に住むのは、少し気が引けるというか……。
「いや、その、何も心配はいらない。慣れるだろう」
「母さんも、父さんに嫁いできて、いろいろ知ったけど……、……そうね、慣れるかな……」
　慣れるって何？慣れるって。
　母さん、その間は何？その間は。
　今まで過ごしてきた自分の周りの環境と、そこまで変化があるのだろうか。
「ただ、少し……秘密が多い。ただ、それだけだ」
　秘密、ね。
　まあ、秘書ってことは、そうなんだろう。
　一般に公にできない事柄とか、たくさんありそうだ。
「ちなみに、その家には次期頭代とかお嬢様、おぼっちゃまとか居(お)られるが、丁寧語はいいだろう」
「なぜ？」
「旦那様と次期頭代がそれを望んでいる。お前は、ご子息様方との年齢差が、ないからな」
「それに、浩二、アナタには、ゆくゆくは、さくらちゃん……、コホン、次期頭代の秘書になってもらおうと思ってるの」
　次期頭代の秘書か……。
　とりあえず、そのひとがどんなヤツなのか、ってことだな。
「わかった。とりあえず、赤波根家ってとこで、お世話になればいいってこと？」
「そうだ。と、いうことでな、今夜向かうからな、簡単な荷物をまとめてくれ」
「えっ？今夜？」

「ああ、１８時に家を出ようと思ってるから、それまでにな」
「ここに、キャリーバッグとダンボール箱を用意してるから、荷造りお願い」
「ダンボールは、業者に頼んで、明日中には届けさせるつもりでいる。安心しろ」
これで話が終わったようで、両親は、それぞれの行動をし始めた。
父さんは、テレビを付けてのんびり、母さんは、台所で皿洗いを始めた。
とりあえす、１８時までに引っ越し準備をしなければならないようだ。
キャリーバッグと、何個かのダンボール箱を持って、自分の部屋に戻る。
どうやら、俺の引っ越しは確定事項らしい。
両親共に忙しくなり、家に帰ってこれないと言っていたが、どこまで本当なのか。
少なくとも、俺に1人暮らしはさせたくないみたいだ。
そして、次期頭代の秘書というのも、両親の中では、決定されていることらしい。
とはいえ、仕事をする必要がない……まあ、学生だし、学業を優先しろってことなのだろう。
とりあえず、次期頭代、彼がどんなヤツかによる。
俺は、ため息をつきながら、引っ越し準備に取り掛かった。

★★★

１８時。
父さんの運転する車で出発する。
そういえば、学校は代わることになるのだろうか。
そんな疑問を抱えながら、窓の外を眺める。
どうやら、車は高速道路を使うようだ。
２つほどインターチェンジを経て、下りる。

しばらく走ると、駅の前を通り過ぎる。
駅からすぐの場所に、大きな石造りの門があった。
門の周りには、背の低い樹木が、塀代わりとして連なっている。
車が門の前に進むと、自動的に扉が開く。
さらに車は奥に進んだ。
視界が開けたところに、何個かの明かりを伴う大きな建物が見えてくる。
まるで、中世ヨーロッパの城を思わせる、この国には不釣り合いな城が。
城の入口付近はロータリーになっている。そこに車が着いた。
車から出て、思わず見渡してしまう。デカい城だなぁ……。
父さんは「屋敷」って言ってたけど、これ、違うよなぁ……。
「ようこそ、いらっしゃいました、浩二様」
不意に声をかけられる。
目の前には、壮年の白鬚を蓄える男性が立っていた。
「私、ここで執事をしています、宮本（みやもと）、と申します」
男性は軽くお辞儀をしてくる。
黒い執事服がよく似合う。
綺麗な白髪白鬚は、彼の笑顔と相まって、とても好感を持てる。
そんな年の取り方をしたい、そう思えるくらいに。
「どうか、お見知りおき下さい」
「それはご丁寧に。私は田中　浩二と申します。よろしくお願いします」
そこまで挨拶をすると、宮本さんは、両親の方を見る。
「これはこれは、久志（ひさし）様と初美（はつみ）様ではないですか」
「ご苦労様、宮本」
「ご苦労様です、宮本」
「ところで、ウチの愚息を連れて来たのだが、次期頭代様は居（お）られるか」
「ハイ、19時に到着すると伺っていましたので、お待ちになられています」

「そうか、では、宮本。愚息の案内を頼む」
そう言うと、父さんは車に戻っていく。駐車場に停めに行くようだ。
母さんは、引き続き、俺と宮本さんと共に行動するようだ。
「とりあえず、部屋に案内します」
宮本さんは、そう言うと、つかつか歩き始めた。
俺と母さんはそんな彼についていく。
「あ。初美様、来られていたのですね」
途中、母さんに声をかけてくる女性が。
彼女は、白を基調とした服……いわゆるメイド服を着用している。
顔はモデルのように綺麗で、髪の毛は白。いや、銀髪か。
背も少し高い。
「まあ、サクヤさん」
「いえ、咲〇ではないです、パット長ではないですので」
「そう?あ、少し首がずれてますね」
そう言うと、母さんは、メイドさんの頭を両手で挟む。
そして上へ持ち上げると、「置き直した」。
「これでヨシ、と」
「初美様、ありがとうございます」
「ひとの頭を持つって、サクヤさん相手じゃないと、なかなかできませんからね」
……置き直す……頭を持つ……?
あれ?気のせいか?今、そのメイドさんの頭と胴体が離れていたような……
「……母さん」
「何」
「今、そのメイドさんの頭……」
「あ、そうだ、サクヤさん、この子、息子の浩二」
俺の言葉を遮って、メイドさんに紹介を始める。
「ああ、あなたが浩二様」
そう言うと、綺麗なお辞儀をした。

が、彼女の頭が床にコロン……
「私はメイド長をしている、如月（きさらぎ）と申します。以後、お見知りおきを」
床に転がった頭が、そのまま自己紹介をし始めた。
顔はこちらに向いていない。あらぬ方向に向いて話している。
身体は、お辞儀をしたままだ。
「サクヤさん、頭、頭」
母さんが慌てて拾い上げ、如月さんの首にセットする。
「ね、浩二。言ったでしょ、秘密がいっぱいある、って」
俺には、そんなフォローをしてくる母さん。
いやいや、そんな秘密だとは思っていないから。
秘密の種類が違い過ぎる。予想斜め上だよ。
「最初は驚くだろうけど、慣れるよ」
慣れるよって……、限度があるって……。
如月さんと別れて、引き続き、宮本さんの後を歩いていく。
「あっ、初美様。ごきげんよう」
母さんは、また、メイド服を着た女性に声をかけられている。
この女性は、赤い髪をしていて、八重歯が可愛い。
掃除中なのか、手には、モップとバケツを持っている。
「ねえ、初美様ー、貴女のいい匂い、堪らないから、吸わせてよー」
「ダーメ。魅力的な女は、誰にも縛られないも・の・よ」
「チッ、久志には縛られてるくせに！」
「ふふーん、アナタは、トマトジュースで我慢なさい」
「人間の血が吸いたい……」
ここまで言った後、メイドさんの目線がこちらを向く。
「あっ、クンクン……いい匂い。人間。ねえ、私にシェアしてくれない？」
野性的な、獲物を狩るような目で睨まれて、動けなかった。
俺に向けて手を伸ばしてくる。母さんがその手を叩いた。
「初美、何すんのよ！」
「その子、私の息子よ。あとは、わかるよね」
「えーっ！初美の息子ってことは、久志の息子だよねー」

「そうよ」
「ちくしょー、あの男と同じじゃない！信じられない！」
メイドさんは地団太を踏んでいる。母さんはどや顔。
「久しぶりに、私のダーリンが、手に入ったと思ったのにー」
メイドさんはそう言うと、ボンッと、煙に包まれた。
煙の中から、少し大きめのコウモリが廊下の奥の方へ飛んで行った。
飛んで行った後、煙が晴れてきたが、そこには誰もいなかった。
モップやバケツなど、清掃用具を残して、メイドさんは何処に行ったのだろうか。
「か、母さん」
「何？」
「メイドさんが消えた……」
「もう、皐月ったら。仕事放棄して……。サクヤさんに報告案件ね」
こんな事態にも、母さんは通常営業。
俺がおかしいのか？いや、そんなはずないはず。
「まあ、慣れよ、慣れ」
驚いている俺に、母さんは笑顔でそんなことを言ってくる。
慣れにも限度があるわ！
「浩二様、ここでございます」
宮本さんに案内された部屋は、それなりに広かった。
ベッドもあり、テレビや冷蔵庫、洗濯機。
炊事場もトイレもあり、この部屋だけでも暮らすことができそうだ。
しかし、風呂どころか、シャワーもない。
「浩二様、19時になったら、謁見の間までお越しください」
「謁見の間って、どこ？」
宮本さんは、地図を渡してくれた。
主に使うであろう部屋には、蛍光マーカーで分かるようにしてあった。
この城、どうやら主に使っている部屋は、1階と2階の一部にしか

ないらしい。
「宮本さん、わざわざ、ありがとうございます」
「いえ、執事として、当然のことです」
彼は恐縮している。
「あと……、浩二様、私(わたくし)のことは、『宮本』とお呼び下さい」
「はあ……」
「そして、ウチのメイドがご迷惑をおかけしました」
「……それは、いいのですが……」
ご迷惑……というか、普通では起こらないことがあったような……。
「ムムッ」
「どうしたの？宮本」
「初美様、巴(ともえ)様がお呼びです。至急来てくれ、だそうです」
「全く、あのお嬢様は……、今日くらい休ませてよ……」
「初美様、そんなことを言わずに、お願いします」
「わかったわよ、行けばいいんでしょ、行けば。行くと言っておいて」
「ハイ、承りました」
宮本さんと母さんは、そんな会話をしている。
母さんへの呼び出し？
でも、さっきまでは、そんな物なかったような対応をしていたはず。
……宮本さんは、どうやって連絡を受けたのだろうか……
「浩二、母さんは、ちょっと行ってくる」
「うん」
母さんは部屋を出て行った。
地図はもらったけど、初めての建物内移動だ、母さんがいないのは、不安だなぁ……。
決して寂しいわけではない。
ただ、時間が指定してるため、迷いそう……。
「初美様が出て行かれたので、案内メイドをよこします」
「ハイ」
「それまで、部屋でごゆるりと」

そこまで言うと、宮本さんも部屋を出て行った。

第2話　双子

部屋で、メイドが呼びに来るまで待つ。
宮本さんに「１９時に謁見の間に来てくれ」と言われていいた。
ただ、それは母さんに用事がなかった場合だったようだ。
現に、今は１９時を過ぎている。
しかし、まだ、メイドは来ない。
部屋にある収納にキャリーバッグの中身を入れようか。
そう思って行動を起こそうとしたとき、それは起こった。
コンコン
ドアをノックする音がした。
メイドさんが呼びに来た……しかし、ノックの後、言葉がない。
おかしいなぁ。
物語やアニメなどで登場するメイドなら、一声あってもいいはず。
ノックだけなのは、しかもドアも空けてこないのは、不思議だ。
誰かが呼びに来たのは、間違いない。
そう思い、こちらからドアを開ける。
外には、小さい女の子が２人。
黒髪と茶髪で、２人とも顔がよく似ている。
背丈や顔が幼いところから、子供のようだ。
俺は、彼女たちに目線を合わせるため、その場でしゃがんだ。
「こんにちは」
「「こんにちは」」
始めて会うこの娘たちに、まずは挨拶だろう。
怖気づくかと思ったら、すぐに返事が返ってきた。
「おにいさん、さっきここにあんないされてた」
「ミヤモト、とハツミ、に、つれてこられた、の、しってるよ」
２人はたどたどしくも、なんとか話してくる。
子供相手は、友人の弟を相手したことがあるので、少々慣れている。
でも、女の子相手は、初めてなんだよなぁ……。
とりあえず、自己紹介をして、警戒を解いてもらおう。

……って、警戒していなさそう。堂々としているな、この娘たち……。
「俺の名前は、田中　浩二だよ」
「わたしのなまえは、『あかばね　かすみ』」
「ともみの、なまえ、は、……『ともみ』……」
「ともみは、わたしのいもうと」
彼女たちも自己紹介をしてくれた。
黒髪の方がかすみちゃんで、茶髪の方がともみちゃん。
そして、どちらも赤波根家の関係者らしい。
かすみちゃんの方が、少ししっかりしているようだ。
「2人とも、よく似てるね。双子ちゃんかな？」
俺がそう声をかけると、2人とも目を見開いた。
そして、ともみちゃんが、かすみちゃんの背中に隠れる。
さっきまでの、自信あふれた表情は、鳴りを潜め、見た目でもわかるほど、おどおどしている。
「おにいさん、わたしたちが、ふたごって、わかる？」
かすみちゃんが、妹を背中に庇いながら、聞いてきた。
いや、どう見ても双子だろう。
「……わたしたちが、しまいってわかるひと、あまりいない」
「……えっ！こんなに似てるのに？」
「うん、がっこうでは、なまえでしか、しまいって、わかるひと、いない」
なぜなのだろう。髪の色以外、顔、身長、体格も全て一緒の彼女たち。
こんなに「私たち、双子なんです」と主張しているのに、誰も気づかないなんて……。
しかも、かすみちゃんの話だと、見た目では、「姉妹」にも思われないようだ。
「……で、お兄さんに、何か用かな？」
こんな子供に、ましてや、赤波根家関係者に呼びに行かせるわけがないので、質問を投げてみる。

「ようはない、ただ、ちがほしかった、だけ」
「……かすみ、ちゃん……、つまみぐい、は、おねーちゃん、に、おこられる、よ」
かすみちゃんは、堂々とそんなことを言っている。
ともみちゃんは、かすみちゃんの背中に隠れながら、諌めている……のだろうか。
しかし、ともみちゃんは、まだ、俺のことを怖がっているようだ。
ちがほしかった……血が欲しかった……うーん。
先程のメイドさんも血が吸いたいとか言っていたような。
この赤波根家、おかしいことが多すぎる。
父さんも母さんも、「慣れよ慣れ」とは、言っているけど、慣れることができるだろうか……。
「ところで、かすみちゃんは、血が好きなの？」
「うん、ちがすき」
「どんなところが？」
「のんでいると、しあわせなきぶんになる」
「どういう感じで、吸うのかな」
かすみちゃんが言うには、人さし指を安全ピンで少し傷つけてくれると、吸えるのだ、とか。
学校では、工作と体育の授業のときに、たまに、ケガした友達のものを吸うらしい。
……これって……でも、子供が好き好んで血を飲んでいるだけ……ないか、ないない。
なぜ、血がそんなに好きなのだろうか……。
「かすみちゃんって、もしかして、保健委員、やってる？」
「うん。なんでわかった」
「なんとなく……な」
しかしな、この姉妹、美人になりそうな顔立ちしてるんだよな……。
女子はともかく、男子からも、血をもらうことがあるのだろうか。
思春期を迎えつつある、彼女たちの同級生男子にとっては、悩ましいことになっていそうだ。

「かすみちゃん、クラスの男子からも、血をもらったことは？」
「あるよ」
「……お父さんは、許しませんよ！」
「「……!?」」
おっと、こころの声が出てしまった……。
２人とも、一瞬、何が起こったのかわからず、絶句している。
羨ましいのう、羨ましいのう、この姉妹の同級生だったらよかったのう。
これは、この娘たちのクラスの男子、こぞってケガをしているかもしれない。
ケガした箇所から、口で吸うんだろうから、危ない絵が思い浮かぶ。
「おとこのこって、よくけがするけど、わたしよりも、ともみにたのみたがる」
「……かすみちゃん、ともみには、いらない、から、まわして、こないで」
姉妹でも複雑な事情がありそうだ。
しかし、双子でも好みは分かれるようだ。
友美ちゃんの方は、血を好まないらしい……って、普通はそうだよな。
「ともみは、せーえきが、すきなんだよね？」
「うん。せーえき、を、さがし、なさいって、おかあさん、いってた」
「せーえき」ってなんだろう？
俺の頭の中に、それに該当しそうなものが思い浮かんだ。
が、そんなわけがないと、あわてて候補から消し去る。
……きっと、この家族で「せーえき」と呼ばれる何かがあるのだろう。
「ともみちゃん、『せーえき』って、何かな？」
「んーとね、白くて、ドロッとしてて、ネバネバ、しているもの？」
思わずギクッとしてしまう。
先程、思い浮かべたものと、特徴がほぼ同じ……。
誰だ、こんな子供にそんなものを与えるヤツは。

しかも「好き」と言わせてしまうまで。
……そこまで思い浮かべて、かき消す。そんなこと、あるはずがない。
これ以上、質問してもいいのだろうか。
怖い反面、興味も出て来る。
この姉妹の容姿は、子供とはいえ、美人なのだ。
「ともみちゃん、それは、どうやって吸うのかな？」
とうとう、興味本位に禁断の質問をしてしまった。
ともみちゃんが、「せーえき」をどのように摂取するのかは、わからない。
分からないのに、「吸う」という表現を用いてしまったことに、自分でも苦笑する。
吸うってどこから？
賢明な男子諸君、経験を済ませた淑女の皆さんならば、お分かりだろう。
なぜか、心臓がドキドキしている。
「……コ・ウ・ジ、君……」
かすみちゃんともみちゃんは正面にいるはずなのに、左から声がする。
しかも、名前で呼ばれている。この声は、聞き覚えがあるぞ……。
「ウチの妹たちに、何てことを聞いてるのかしら」
声の主は、俺のこめかみに、両手をグーにした状態でセットすると、力強く挟んでくる。
「いてえから、いてえ、赤羽（あかば）、何するんだよー！」
「フン、コージ君が、変な質問するからですよ！問答無用！」
子供たちは、目の前の光景にキョトンとしている。
「このおにいちゃん、何か変なことを、しませんでした？」
「……あゆみ姉、おにいちゃんとなかがいいんだね」
赤羽は、子供たちに問いかける。
この女性は、赤羽（あかば）　あゆみ。
俺の高校の同級生で、一番仲のいい女友達である。

中学時代から仲良くなって、高校も同じ。付き合いも6年目に入った。
恋愛感情がないといえばウソになるが、俺としては、今のままでも満足している。
告白して、関係がぎくしゃくするよりは、今の関係を続ける方が、お互いのため。
……まあ、学校では、「公認夫婦」とウワサにはなっているようだが……。
「あゆみおねーちゃん、ごめんなさい」
「……えっ？」
不意にともみちゃんが謝罪してきた。
予想していなかったことのようで、赤羽はキョトンとしている。
「おにいちゃん、あゆみおねーちゃん、の、獲物（せーえき）、だった、んだね」
「……何を言ってるのかしら、この娘（こ）……」
「ほら、おにいちゃん、の、せーえき、が、あゆみおねーちゃんに、はんのう、してる、よ」
「…コージ君！違いますからね！違いますって」
赤羽の顔が真っ赤になっている。
彼女は必死に弁明しているが、俺には、聞こえていなかった。
俺のせーえきが、赤羽に反応してる？
どういうことなんだろうか。
思わず、自分の下半身を、まじまじと眺めてしまう。
赤羽がともみちゃんに弁明している合間に、かすみちゃんが寄ってくる。
「……おにいちゃんの、すけべ」
かすみちゃん、そんなこと、ボソッと言わないで！
さらに爆弾を落としていく。
「あゆみ姉は、おにいさんのことをすきっぽいから、あんしんしてください」
その言葉が聞こえたのか、赤羽がこちらを見ていた。
顔が真っ赤で、余裕がなさそうだ。

アイツ、テンパったらどこまでも行くからなぁ……。
仕方ない。俺は、自分自身の心の中の動揺を抑えながら、行動に移す。
「赤羽」
「……何ですか！私は、どうせ、貴方のことが好きですよ、悪いですか？」
「悪い！」
「えーーっ？そんな、ご無体なーーー！」
「ところで、赤羽は、ここに何しに来たんだ？」
「あーっ！そうでした！忘れてました」
一瞬、愕然とした表情をした赤羽だったが、俺の質問を聞いて、ようやく落ち着きを取り戻す。
「そうでした、そうでした。私は、コージ君を呼ぶためにここに来たのでした」
「赤羽は、メイドのバイトをやってたのか……」
「えっ？ああ、メイドさんは、手が離せないようでしたので、私が呼びに行くことになりました」
そうかー赤羽が、メイドの代わりに呼びに来たのか。
……と、いうことは、ようやく次期頭代なるひとに会いに行けるということらしい。
「かすみ、ともみーー！行くよ！」
「うん」
子供2人もついてくるようだ。
先程と比べると、大人しい。赤羽を揶揄うのは飽きたのか、空気を読んだのか。
「ところで、赤羽」
「何でしょうか、コージ君」
「お前って、ココの関係者なのか？」
4人で歩きながら、先頭を歩く赤羽に、声をかける。
もし関係者なら、いろいろ聞いておきたい、そんな軽い気持ちだった。

「関係者も何も」
彼女は、ここで言葉を止めた。
そして、立ち止まって、俺と向かい合う。
「私は、赤波根家・次女・赤波根（あかばね）　あゆみ、といいます」
「あれ？お前の苗字、赤羽（あかば）じゃ、なかったのか……」
「うん……」
驚いた。今まで苗字を偽っていたのか……。
彼女の目を見つめる。彼女も見つめ返したままだ。
子供たちは、何が起きたのかわからないのか、俺たちを静観している。
「今まで、騙していて、ごめんなさい、コージ君」
彼女は、丁寧に謝ってくる。
「父の方針で、苗字をかえていました。ごめんなさい」
彼女の目から、涙がこぼれてくる。
6年間騙し続けていたことについて、罪の意識があったのだろう。
俺は思わず、彼女を抱きしめていた。
「コージ君に、ずっと言えなくて、心、苦しくて」
「大丈夫、名前が違うと驚いただけだ。気にするな」
そう言いながら、彼女の頭を撫でる。
赤羽は俺の胸の中で、泣いているようだ。
同級生女子にこのようなことをするのは、気恥ずかしい。
けど、自分の思いついた最良の行動は、これしか思いつかなかった。
「許してくれますか？」
「ああ」
2人で見つめ合う。
お互いの顔が近づき、唇と唇が……
「キス、するの、かな」
「するんじゃないの」
「わー、あゆみおねーちゃん、獲物（せーえき）、かくほ、だね」
「あゆみ姉のもの、だったら、わたし、ち、すえないな、ざんねん」
そんな2人の子供の視線に気づき、中断した。

俺と赤羽、お互いを見つめ合い、苦笑する。
「コージ君」
「……なんだ」
「この用事が終わりましたら、私の秘密を、全部、話しますから」
「……秘密？まだあるのか？」
「はい。全部、受け止めて貰えますか？」
懇願するような表情で、頼まれると……、断れないじゃない。
「……ああ……」
俺が了承すると、「よかった」と小さく呟き、笑顔を見せる。
改めて見ると、髪形は違うにしても、双子が成長した感じの美人だということに気づく。
3人を見並べると、姉妹なんだなーということが、よくわかった。
「では、謁見の間へ向かいましょう。姉が待っています」
そう言って、彼女は前を歩いていく。
俺は、彼女の横を歩く。

彼女の秘密……。
どんな秘密なのだろうか。
この赤波根家の秘密のことも気になるが、赤羽の秘密は、もっと気になる。
彼女もこの家の関係者。
彼女の秘密を聞く事で、この家の秘密もわかってくるはずだ。
なぜかそんな確信を持っていた。
「コージ君、着きました、入りましょう」
、
そこには、大きなトビラが鎮座していた。

第3話　禁秘

目の前に、大きな茶色の両開きトビラがある。
海外の城や屋敷では、よく見られる形のものだ。
最も知識として得たのは、洋画からなので、実際に見るのは初めてだ。
赤羽、お前、お嬢様だったのか……。
コンコン
「連れてきました」
赤羽が、トビラをノックして、声をかける。
「入って」
部屋の中から、女性の声が返ってきた。
赤羽がトビラを開ける。彼女に促されて、部屋に入る。
この部屋は「謁見の間」。
上には多数のシャンデリアが、キラキラ輝いていた。
トビラから、奥へ向かって真っすぐ、約3ｍ幅の赤い絨毯が引いてある。
赤い絨毯の外側は、白い床になっていて、シャンデリアの光が反射する。
部屋の両側には、天井まで続く石造りの円柱が5本ずつ、壁に沿って1列に並んでいる。
その円柱それぞれに、彫刻が施され、見た感じ豪華な造りになっていた。
柱と柱の間が約1ｍ、そこには、様々な壁画が飾ってあり、鮮やかな雰囲気を演出している。
吹き抜けで、2階部分が見える。そこの柵にも飾り彫りが施されていた。
この、普通に生活していると出会うことのない光景に、思わず見渡してしまう。
そんな俺の左側に、赤羽がいる。
右側にはかすみちゃん、ともみちゃんという形で、横一列に並んで

いた。
彼女たちは、声を出すこともなく、正面を向いている。
「この部屋は、こんな使い方しか、できないけどね」
不意に声を掛けられ、その方向に顔を向ける。
赤絨毯の先には、大きな机が鎮座していた。
その机も、何処かの講義室でしか使わないような、教授用机。
その奥には、黒く長い髪をした若い女性が、こちらを向いて立っていた。
顔は、赤羽や双子に似ているため、彼女たちと血縁があるひとだということは、分かる。
ただ、赤羽よりも、より女性的な怪しさをまとっている。
着ているベージュグレーのワンピースが、雰囲気を醸し出しているようだった。
彼女と目が合ったような気がした。
彼女がニヤリと微笑む。
自然と彼女の立ち姿から、目を離せなくなっていた。
「服、似合ってるかな？」
不意にそんなことを聞いてくる。
答えるまでもない、非常に魅力的だ。
「はい、非常に似合ってます」
「生涯の伴侶との、初めての顔合わせということで、気合い入れて選んだから、当然だね」
さも当たり前のように答えられる。
「生涯の伴侶」、それはどういう意味なのだろうか。
しかし、そんな疑問は一瞬で手放していた。
彼女から目を離せない。魅力的だ。
机の方へ、一歩ずつ、足が動いていく。
「……お姉様、生涯の伴侶って、どういうことですか！」
悲鳴にも似た、聞き覚えのある声により、俺は歩くことを止めた。
……というより、足が止まった。
そして、彼女から離せなかった目を、離すことができるようになっ

た。
「しかも、コージ君に『魅了』を使うなんて！」
「悪い悪い、なんか面白くなってね」
赤羽が女性に向かって怒ってる。
「お姉様」と呼んでいたなぁ……。
ところで、「魅了」ってなんだろう……？
「でも、あゆみ。伴侶は間違ってないと思うぞ」
赤羽が睨みつけている。
その目線を受けている女性は、気にしていないようだ。
「彼は、私の秘書になってもらう予定だからな」
彼女はそう言うと、俺の方を向き直る。
秘書……、そういえば、そんな理由でここに来たはずだったな。
赤羽はというと、小さくため息をついていた。
「赤波根家・長女で次期頭代の赤波根（あかばね）　さくらだ。よろしく」
「私は、田中　浩二です。よろしくお願いします」
次期頭代って、女のひとだったのか。
確か、母さんが「さくらちゃん」と言っていたような……。
軽く頭を下げられたので、こちらも自己紹介をして、頭を下げる。
「……で、浩二よ」
「何でしょうか」
「ウチのあゆみとは、付き合ってるのか？」
「「……えっ？」」
赤羽との関係を問われたので、赤羽と顔を見合わせる。
そもそもなぜ、最初にその質問が出るのか……。
「さっき、廊下でいい雰囲気だったではないか」
さくらさん、見てたのか？
「防犯のために、カメラがセットされてるからな、しっかりと観察させてもらった」
赤羽は、バツの悪そうな顔をしている。
付き合ってはいないが……。
赤羽の方を見る。彼女の顔が真っ赤になっていく。

「あかね姉は、おにいちゃんのこと、すき」
「おにいちゃんの『せーえき』も、あかねおねえちゃんに、はんのうしてる」
「……そうか、2人は両想いか、そうかそうか」
ここぞというところで、かすみちゃんとともみちゃんが、報告している。
それを聞いて、さくらさんも笑顔で頷いている。
「まあ、お互いが好きで、付き合うなら、何も言いはしないが……」
さくらさんは、2人を交互に見て確認する。
その後、ニヤリとしてこう言い放った。
「……浩二よ、体調管理を怠るなよ」
「……えっ、どういうことですか?」
意味が解らなかったので、問い返す。
さくらさんは、少し驚いた顔をしたが、すぐに表情を戻す。
「……あゆみ、浩二に、何も言ってないのか?」
「はい、これが終わり次第、コージ君に伝える予定です」
終わり次第伝える……。
ここに来る前に、赤羽が言っていた「彼女の秘密」のことだろう。
「ならば、そのことについては、あゆみに任せよう」
「はい、わかりました……」
「それ以外については、私から説明する」
さくらさんは、この赤波根家について、説明し始める。
「ウチは、他と違って少々特殊だからなぁ……」
まず、この家の頭代は、赤波根(あかばね) 誠(まこと)といい、ヴァンパイアであるということ。
そして奥方様は、巴(ともえ)といい、こちらは、サキュバスである。
この2人から生まれた子供は、3男4女、全部で7人いる。
その子供たちは、一部を除き、親のどちらかの性質を多く受け継いでいる。
「例えば、私は、ヴァンパイアの性質を濃く受け継いでる」
さくらさんは、さらに説明を続ける。

「見分け方は簡単だ、黒髪だとヴァンパイヤ、茶髪だとサキュバスの血を濃く受け継いでいる」
なるほど。そんな見分ける方法があるのか。
赤羽とともみちゃんは、茶髪だからサキュバス。
かすみちゃんは黒髪だからヴァンパイヤということなんだな。
当然、さくらさんは、自己申告した通り、黒髪ということで、ヴァンパイヤということになる。
でも、それって、髪を染めたら、わからなくなるのでは……。
しかし、ヴァンパイヤとサキュバスか……。
ヴァンパイヤは血を吸い、サキュバスは精液を吸うと言われているのが一般的。
だから、かすみちゃんは血を吸いたがり、ともみちゃんは、「せーえき」と発言するのか。
小学生としての在り方として、大丈夫なのだろうか。
赤羽はどうなんだろう……。
彼女から、そのような発言は、聞いたことがない。
俺の知らないところで、男を襲ってる？
……彼女に限って、そんなことはないとは思うが……。
「そういえば、浩二。お前の両親が、ウチの両親の秘書をやっていることは聞いているか？」
「はい、聞いています」
「そして、先祖代々、ウチに遣えているのだが、理由がある」
「……」
「お前の一族は、血が非常に不味い」
「……はあ」
「なので、近くにいても、吸いつくして、殺してしまうことがないんだよ」
「それで、代々……」
「そうだ。初美さんは、一族ではないが、親を喰らうわけにいかん」
「親？」
「ああ、私たちにとっては、大切な乳母だからな」

そういうことか……。血が不味いのか。
そして、母さんは、彼女たちの乳母。
そんなことをしていたなんて、まったく気が付かなかった。
納得できるような、できないような……。
「あと、お前には、これを持たせておく」
さくらさんは、机からカードを取り出す。
「ヴァンパイヤは、血が不味いことで回避できる」
さくらさんは、言葉を続ける。
「サキュバスの能力回避は、このカードで対策するようにしている」
「サキュバスの能力の回避？」
「ヴァンパイヤも一応ある能力なのだが、相手を魅了してしまう能力があってな」
ヴァンパイヤやサキュバスは、吸うものが違うが、人間を襲うというところは一緒である。
映画などで、ただやみくもに襲い掛かっているように見えるが、実はそうではないようだ。
ヴァンパイヤは、イケメンな男が多い。それは、女性を魅了して寄ってきたところを襲うためである。
女性であるヴァンプも、同じように女性的な身体の、男性受けをするオーラをまとっているそうだ。
そして、寄ってきた人間に噛みついて、血を吸いながら、自分の血を送り込む。
ヴァンパイヤの血を送られた人間は、ヴァンパイヤとして、活動を始めることになるのだ。
サチュバスは、襲う対象になった人間の、理想の異性に化けて、おびき寄せて性交をする。
欲しいのは、人間の精液。相手にいい気分になってもらい、注入してもらう。
あまり知られていないが、サキュバスは、雌雄同一で、サキュバスの男版、インキュバスにもなれる。
インキュバスは、サキュバスとしてもらった精液を、人間の女性と

性交することによって、送り込み、自分の子を孕ませる。
その生まれた子供は、サキュバスになる、そんな節理だ。
そういうこともあり、ヴァンパイヤもサキュバスも、仲間を作るために、人間を襲う。
人間側から見るとそうなのだが、ヴァンパイヤ、サキュバス当人から見ると、少々違うようだ。
サキュバスを人間が見た場合、その人間が勝手に、理想の異性に見えてしまい、好きになってしまうのだそうだ。
同じように、ヴァンパイヤの場合も、イケメンや美女として見えてしまうらしい。
勝手にそのオーラがにじみ出てしまうため、普通に生活するには、苦労するようだ。
「そのオーラの影響を抑えるために、このカードがある」
カードを俺に手渡す。何の変哲の無い、赤いカードだ。
「まあ、田中家の場合、下着にその効果がすでに施されているが、な」
「どういうことですか？」
「ウチの親父が、研究と発明が好きでね、このカードと同じで、わざわざ作ったらしい」
さくらさんの親父……赤波根　誠・現頭代が、サキュバスの奥方と結婚するときに発明したそうだ。
理由は「周りの人間がウザい」というものだったようだ。
まあ、どちらも人間を誘惑してしまう能力を持つため、必要以上に集まられるのは、障害以外の何物ではなかったのだろう。
また、周囲で働いてくれる人間が正常でなくなるのも、困る。
そのため、赤波根家に出入りする両親が住む俺の家には、自然と置かれるようになったようだ。
俺についても、周囲に赤羽がいるため、両親が頼んだらしい。
「まあ、ここまでが、ヴァンパイヤとサキュバスの説明と、赤波根家の秘密の説明になるが」
さくらさんは、付け加える。
「そもそも、私ら子供は、どちらの血も受け継いでるから、一概には言

えん」
赤波根家の子供たちの場合。
まず、血や精液を身体に取り込んでいなくても、死ぬことはないようだ。
代替品でいいらしい。
ただし、体調は良くはなく、ヴァンヴァイヤの血を強く受け継いでいる場合は、貧血気味である。
サキュバスの血を受け継いでいる場合は、精液を取り込んでいなくても、体調に支障はないが、男の匂いに敏感になるようだ。
さくらさんの場合、ヴァンパイヤの血を濃く受け継いでいる。
・ニンニク、香草は苦手
・日光に少し弱く外での運動では貧血気味
・鏡やガラスには、少し薄く映る
・体力は無尽蔵にある、ただし室内に限る
・コウモリに化けることができる
その他のヴァンパイヤが苦手とされる物事は、サキュバスの血が入ることで、緩和されているようだ。
かすみちゃんも同じ性質ようで、俺の隣で1つ1つ頷いている。
「まあ、これについては、個人個人で微妙に違うから、あゆみたちに聞けばいい」
俺の隣で、赤羽と双子が頷いている。
「まあ、お前は今日ウチに来たばかりだ。ゆっくり覚えて、慣れるといい」
「ハイ」
「秘書の仕事というのも、浩二が大学を出るまでは、試用期間なので、思ってくれているだけでいい」
そこまで言うと、さくらさんは、赤羽の方に目を向ける。
「あゆみ。後の詳しい説明はお願いしてもいいか？」
「ハイ、お任せください、お姉様」
さくらさんは、ウンウンと頷いた後、思いついたように、一言付け加える。

「あゆみ、避妊はしろよ！奥方様と違って、放出できないだろうからな」
「お姉様！」
赤羽は、その言葉で真っ赤になっている。
避妊って……、赤羽とそういうことをするかも、そういうことだよな……。
想像して、身体が熱くなった。
「おにいちゃんのせーえきが、あゆみおねえちゃんにむいてる、よ」
「おにいちゃんは、やっぱり、あゆみ姉のことが、すき」
「あーあーあー、2人とも、ちょっと黙って！」
かすみちゃんとともみちゃんの発言で、赤羽が尚も混乱する。
その様子を見ているさくらさんは、まんざらでもなさそうだ。
「では、赤波根　さくら次期頭代、私はこれで」
「ああ、これからはよろしく。そうそう、私のことは『さくら』でいいから」
「いいんですか？」
「いい、いい。畏まられると、こっちの肩が凝る」
「わかりました。失礼します」
俺は、トビラから部屋を出る。姦し三姉妹は、まだ中にいるようだ。
ヴァンパイヤとサキュバス。赤波根家の秘密を思い返して、辟易してしまうのであった。